

# 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属:(学部(研究科)・学年)保健学研究科

氏 名: 谷口 かおり

授業科目名	基礎看護・地域看護学特別研究
研修先(国・地域) 滞在地	アメリカ合衆国、マサチューセッツ州、ボストン
研修期間	2016年9月3日～9月10日
〔研修を通じて得た成果〕 Boston Children Hp:全米 No1 の診療実績を持つ。もちろん、先天性疾患、循環器、悪性腫瘍のはじめ、精神疾患、虐待など、全米から患者は訪れる。病院の雰囲気は、全世界共通を意識しているような作りで、ユニークなフロア、子どもラジオ局のブースや、音の出る階段、おもちゃ売り場など子どもはもちろん大人も楽しめる工夫がいたるところにあった。病院に勤めるNP の話を伺い、NP の社会的地位が確立していることはもちろん、看護師としての自律性が高いことが日本との差を感じた。 Boston College:校内の散策、教育施設の見学をした。演習では、患者の設定をして、ロールプレイをするシミュレーション室があり、看護師役、患者役とより実践に近い形でできるような環境が整っていた。Holly B. Fontenot 助教より、NP 制度の説明を受けた。NP という、「ミニドクター」というイメージが強かったが、看護師本来の役割、医者との違いから専門性を理解しておく必要がある。処方や処置といったことだけでなく、患者に寄り添う気持ち、心遣いができることにあり、「子育てに疲れている患者へ、処方箋と一緒に美容院のクーポン券を渡す、それは一人になって息抜きしなさいという」は看護師ならではの配慮だと感じた。そういった心遣いや思いやりは、日本人の特有の優れているところであると思うが、看護師としての誇りや自信を米国の看護師は身につけていると感じた。シスターロイがおっしゃった、看護師の道を創るのも、NP を確立していくのも看護師、看護師としての誇りや自信を持つことが大切であり、看護師としての実績を可視化していくことの必要性を実感した。 ハーバード公衆衛生大学院: Longwood は複数もの医療機関が集まり、医療・研究の中心である。高所得者が多いイメージがあったが、病院や大学を建てることで社会の安定を図る政策の意図があった。また、医療の格差があるが、そのため基金のシステムが確立しており、Boston のシンボルである、ボストンレッドソックスも年間 80 億もの寄付を行っており、多くの企業が提供しており、多くの人が高度な医療を受けることができ、研究機関として発展している実態を学んだ。Ichiro Kawachi 教授と面会、授業を聴講し、ソーシャルキャピタルについて学んだ。医療が発展するには研究が大切、しかし健康格差を埋めるのは地域力、環境が大きく関わる。公衆衛生の発展は今後の社会において最も重要な課題であると感じた。	
〔研修後の抱負〕 NP 制度について、教科書的な知識しかなく、日本の特定看護師とは制度が異なるものと感じた。米国の社会的背景や、国民性の違いを感じる事はあったが、日本の良さを実感する機会でもあった。NP 制度、看護学が発展していくことは看護師自身が切り開いていくことであり、修士で学んだこと、研究し論文を発表していくことが重要である。グローバル化が進み、海外でも学ぶ機会を今後ももっていきたいと思った。	

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。